

令和 5 年 4 月 19 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K03068

研究課題名(和文) 専門高校生におけるアイデンティティの発達と卒業後の職場適応および離職傾向の関連

研究課題名(英文) Identity development in vocational high-school students: Prospective relations with work adjustment and turnover

研究代表者

杉村 和美 (Sugimura, Kazumi)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授

研究者番号：20249288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、(1)日本の専門高校生において、3年間の在学中に縦断調査で得られたアイデンティティの発達が、卒業1年後の職場適応を予測するの、(2)在学中のアイデンティティの発達は、家庭・学校・地域との関わりによってどのように促されるのかというであった。成果は、第1に、高校3年間を通してアイデンティティの平均値が高かった人ほど、高等教育への進学後や就職後の勉強や仕事でのストレスは低く、充実感が高かった。第2に、在学中のアイデンティティの発達は、親とのつながり、学科所属感、地域への愛着の高さと関連し、アイデンティティの発達は、家庭・学校・地域との良好な関係性に支えられていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第1に、在学中のアイデンティティの発達と就業後の適応の関連を前方向的に検討した研究は世界的にもほとんどない。そのため、青年の社会参加に対するアイデンティティの役割がこれまで以上に明確になり、本研究の学術的独自性は国際的にも高い。第2に、本研究が対象とする岡山県は、専門高校生の比率や新規高卒者の早期離職状況について我が国の平均的特徴を示す。したがって、得られた結果は日本の専門高校生の典型であると言え、日本を代表する知見として国際的に発信することができる。第3に、アイデンティティ発達の要因を、発達的文脈主義の観点から、家庭・学校のみならず地域との関係も含めて検討するところに本研究の創造性がある。

研究成果の概要(英文)：The aims of our research were: (1) to predict how Japanese vocational school students adapt to the workplace one year after graduation, based on their identity development during their three years of high school attendance; and (2) to show in what ways identity development during school can be encouraged within the home environment, school, and the local region.

The results showed that, first, that the higher the average identity value of the individual during three years of high school, the lower their stress and greater their sense of fulfillment after advancing to higher education for further studies or starting work. Second, the development of identity during education is correlated with a better relationship with parents, feeling of belonging to their studies, and greater affection for their region. In summary, it is implied that identity development is supported by positive relations in the home, school, and the local area.

研究分野：発達心理学

キーワード：発達 青年期 アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

青年が健康な心身の発達を遂げて社会を支える有益なメンバーとなるために、どのような支援を行うかは、すべての社会における重要な課題である。国連児童基金(UNICEF)によれば、近年、多くの国と地域において不況、貧困、紛争、過度のグローバル化などによって、青年が社会から疎外される事態が深刻化している。こうした事態の根底にある心理的問題について、UNICEF(2016)の『若者の社会参加』では、青年のアイデンティティの発達の遅れや歪みが指摘されている。アイデンティティは、自分がどのような人間で、この社会の中で何をして生きていくのかを模索し決定することによって生じる、確固たる自己の感覚である(Erikson, 1968; Schwartz et al., 2013)。十分に確立されたアイデンティティは、困難な環境においても、自己の特性と社会の状況をすりあわせながら最適な将来の進路や生き方を決定し、肯定的な生涯発達を導く指針となる(Montgomery et al., 2008)。

このことを念頭に現代の日本を見ると、青年にとってアイデンティティ発達はきわめて重要な課題である。長く続く不況とグローバル化に伴う伝統的な日本の雇用制度の崩壊は、青年の将来展望を困難にしており、79.4%もの青年が自身の将来への不安を報告している(内閣府, 2013)。このような社会状況の影響をとりわけ強く受けているのが、大学に進学しない青年である。日本では98.7%の青年が高校に進学し、うち71.1%が高等教育または専門学校に進む(総務省統計局, 2016)。残る3割の青年(専門高校生)の多くが高校卒業後すぐに就職するが、しっかりとした将来構想やキャリア意識に基づいて進路を選択できる者は少なく、40.9%の新規高卒者が3年以内に離職する(厚生労働省, 2016)。アイデンティティは、若者の将来構想やキャリア意識の基礎となり、困難な環境でも仕事を継続するための内的な指針の役割を果たすため、高校在学中にアイデンティティを十分に発達させることが必要なのである。

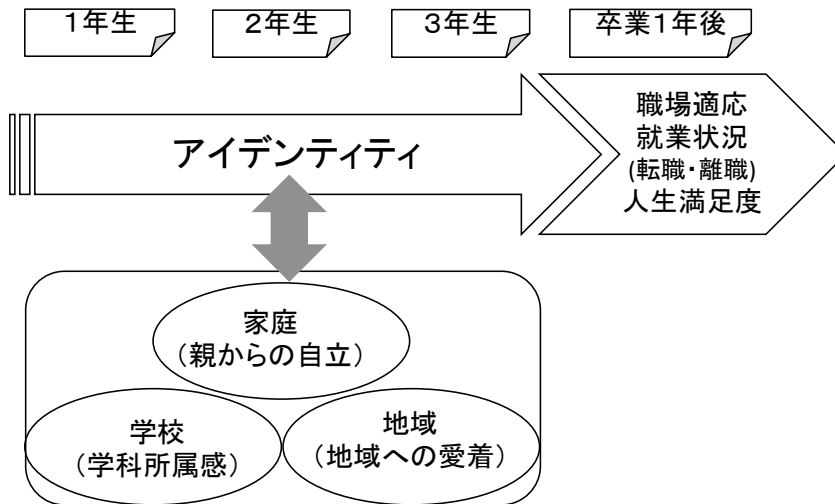
それでは、10代の青年のアイデンティティ発達と就職後の適応や離職傾向の関連はどこまで明らかになっているのだろうか。これまで、既に就職している20代の若者を3ヶ月毎に1年間に渡って調査した縦断研究(i.e., 前向き研究)では、アイデンティティが明確になっていく者は、心理的健康度(e.g., 自尊感情)や社会的適応(e.g., 職場適応, コミュニティ意識)が高まり、不適応(i.e., 抑うつ, 仕事の燃尽き症候群)が低下することが明らかになっている(Luyckx et al., 2010; 2013)。この知見はアイデンティティの発達が職場適応を高める可能性を示唆するが、対象者は20代の有職者で、高校在学中のアイデンティティ発達と卒業後の職場適応や早期離職という現代日本に特有の問題との関連がどうであるかは明らかにされていない。調査対象者を我が国の専門高校生に絞った上で、より長期間の縦断調査を行う必要がある。

また、10代の青年が在学中にアイデンティティを発達させるために、どのような要因が重要なのだろうか。発達の文脈主義(Lerner et al., 2009)の視座から、青年期のアイデンティティは文脈(家庭・学校・地域)の中で発達することが指摘されている。実際、これまで、家族(両親)との良好な関係(Crocetti et al., 2017)、学校での学業成績(Pop et al., 2016)が、アイデンティティの発達に前向きに影響を与えることが明らかになっている。しかし、日本の専門高校生に焦点を当てた場合、家族と学校に加えて地域社会の影響を見過ごすことはできない。我が国の専門高校では、専門を通じた地域との交流が重視され、地域の事業所に就職

し、地域の産業を支えることが期待されているからである(文部科学省, 2017)。

以上の学術的背景を踏まえ、本研究は、青年におけるアイデンティティの発達は、彼らが社会人となった時に社会的適応、具体的には職場への適応や事業所との良好な関係を支え、離職を防ぐ心的資源となり得るかを明らかにする。さらに、アイデンティティを十分に発達させるためには、家庭・学校・地域とどのような関係を築くべきかを検討する(図1参照)。

図1 本研究の見取り図



2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) 日本の専門高校生において、3年間の在学中に年に1度の縦断調査で得られたアイデンティティの発達が、卒業1年後の職場適応や早期の離職傾向を予測するのか、および、(2) 在学中のアイデンティティの発達は、家庭・学校・地域との関わりによってどのように促されるのかという2つである。

3. 研究の方法

岡山県の専門高校等32校の1年生を3年次まで、年に1度の縦断調査によって追跡した。調査対象者の人数は、第1回(1年次)4732名、第2回(2年次)4390名、第3回(3年次)4331名であった。学校にて集団式で質問紙調査を実施した。さらに、卒業18ヶ月後に、このうち426名(高等教育に進学した人253名、就職した人173名)に郵送等で質問紙調査を行った。

質問紙調査の内容は、在学中については、アイデンティティ、親子関係(親への信頼・親からの分離)、学科への所属感、地域への愛着、生活満足感、進路意識、高校生活で頑張っていること(友人関係、勉強など)であった。卒業後は、アイデンティティ、生活満足感、ストレス状態(仕事または勉強に対する燃え尽き感など)、充実感(仕事又は勉強への生き生きとした取り組み感など)、学校適応感(進学者のみ)、主観的大人意識であった。

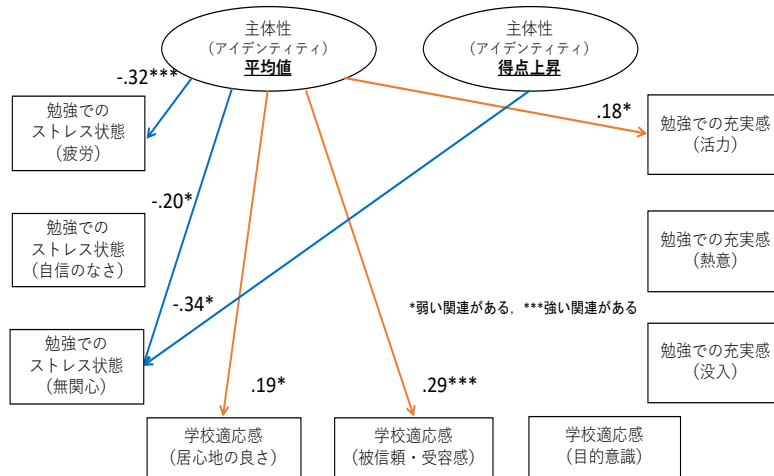
4. 研究成果

(1) 成果1 (研究目的1に対する成果)

専門高校を卒業した後、高等教育(大学、短大、専門学校等)に進学した者では、高校3

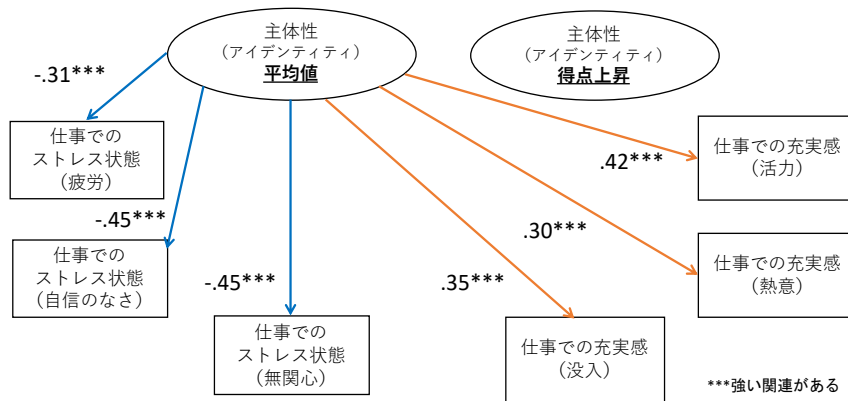
年間を通してアイデンティティの平均値が高かった人ほど、進学後の勉強でのストレス状態は低く、充実感や学校適応感は高い。また、高校3年間でアイデンティティの得点上昇が大きかった人ほど、進学後の勉強でのストレス状態は低い。特に、勉強から距離を置く「無関心」な態度が低い（図2参照）。

図2 進学者における高校3年間のアイデンティティ発達と進学後の適応の関連



専門高校を卒業した後、就職した者では、高校3年間を通してアイデンティティの平均値が高かった人ほど、就職後の仕事でのストレス状態は低く、充実感高い（図3参照）。

図3 就職者における高校3年間のアイデンティティ発達と進学後の適応の関連



以上の結果は、在学中に自分の個性、生き方、社会での役割に関する明確な自覚と方向性の感覚をしっかりと発達させていることが、卒業後の適応にとって重要であることを示唆している。

(2) 成果2 (研究目的2に対する成果)

現在分析中であるが、現時点までで明らかになっていることとして、全体的な傾向として、専門系高校生徒のアイデンティティと進路意識は順調に発達しており、進路意識は1年生から着実に、アイデンティティは特に2年生から3年生にかけて高まる。また、個人差に着目すると、1年生の時からアイデンティティと進路意識が明確な生徒ほど心の健康度が高

く、学科への所属感が高い。

以上のことから、1年生の時にアイデンティティや進路意識が明確な生徒は適応において有利であるが、不明確な生徒であっても各学科で実施される進路指導によって2年生から3年生にかけて十分に発達するチャンスがあると推測される。よって入学直後に生徒の個人差を見極めて生徒指導を行うことが大切であることが示唆される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Kazumi Sugimura, Shogo Hihara, Kai Hatano
2. 発表標題 Identity development predicts task engagement and burnout in the transition to university or work
3. 学会等名 The 18th European Association for Research on Adolescence (EARA) conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sugimura, K., Umemura, T., Hatano, K. & Hihara, S.
2. 発表標題 Personal and social identity formation and well-being in adolescence.
3. 学会等名 The 16th Biennial Meeting of the European Association for Research on Adolescence (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------